R18
FOR AGES 18 AND UP!
綺麗でHなお兄さんは好きですか？

どうです？
似合います？

似合います？って
言われてもだなー
どうしたんだ？
それ？
これですか？

萬屋の主人に
裸にこれを着ると、
殿方はイチコロだと
教えていただので

今度こそ
手を出してもらって
キズものに
してもらおうという
作戦なんです！
ふーん……

で、数日後……

薬研、ちゃんと休めよ！
お前もちゃんと手入れ部屋にいけよー

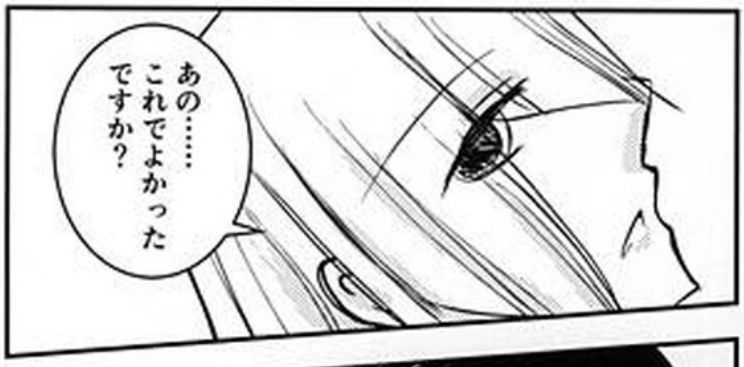
あー……ほんと疲れたなー……
こんな時は……

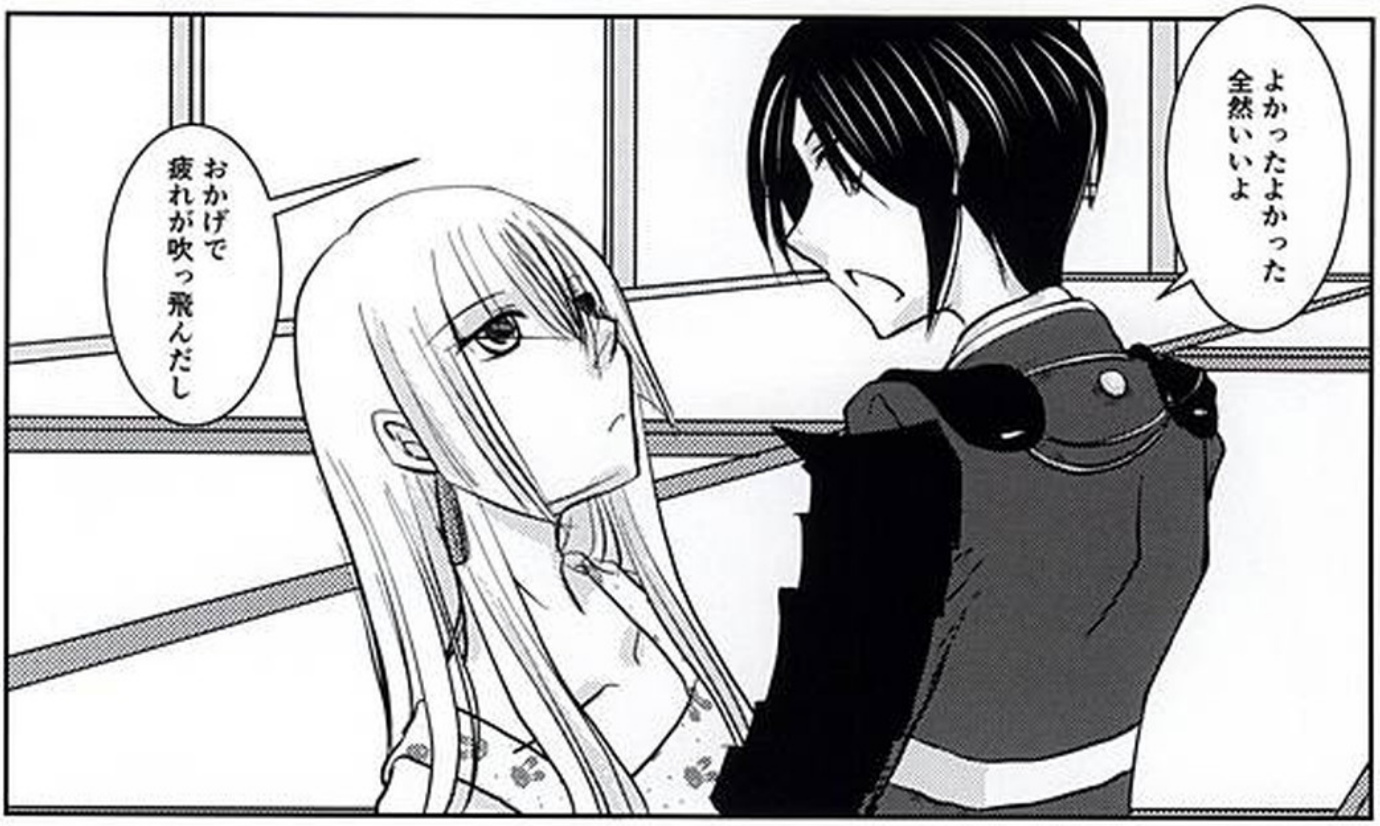
こーせつー
いるかー？

ちょっと
！？
おかえりなさい
お風呂にします？
夕食になさいます？
それとも
ぼわ
わ……
ガシッ

ぼーん
あん時
前田から萬屋のこと
詳しく聞いておいて
よかった……

薬研？
ゴゥ
そんなこと言われたら
江雪からに
決まってんだろ？


あの……
これでよかった
ですか？


よかったよかった
全然いいよ
おかげで
疲れが吹っ飛んだし

そう……ですか！

ぱあぁぁぁ

それは……よかった……！

あぁ

じぃ

……

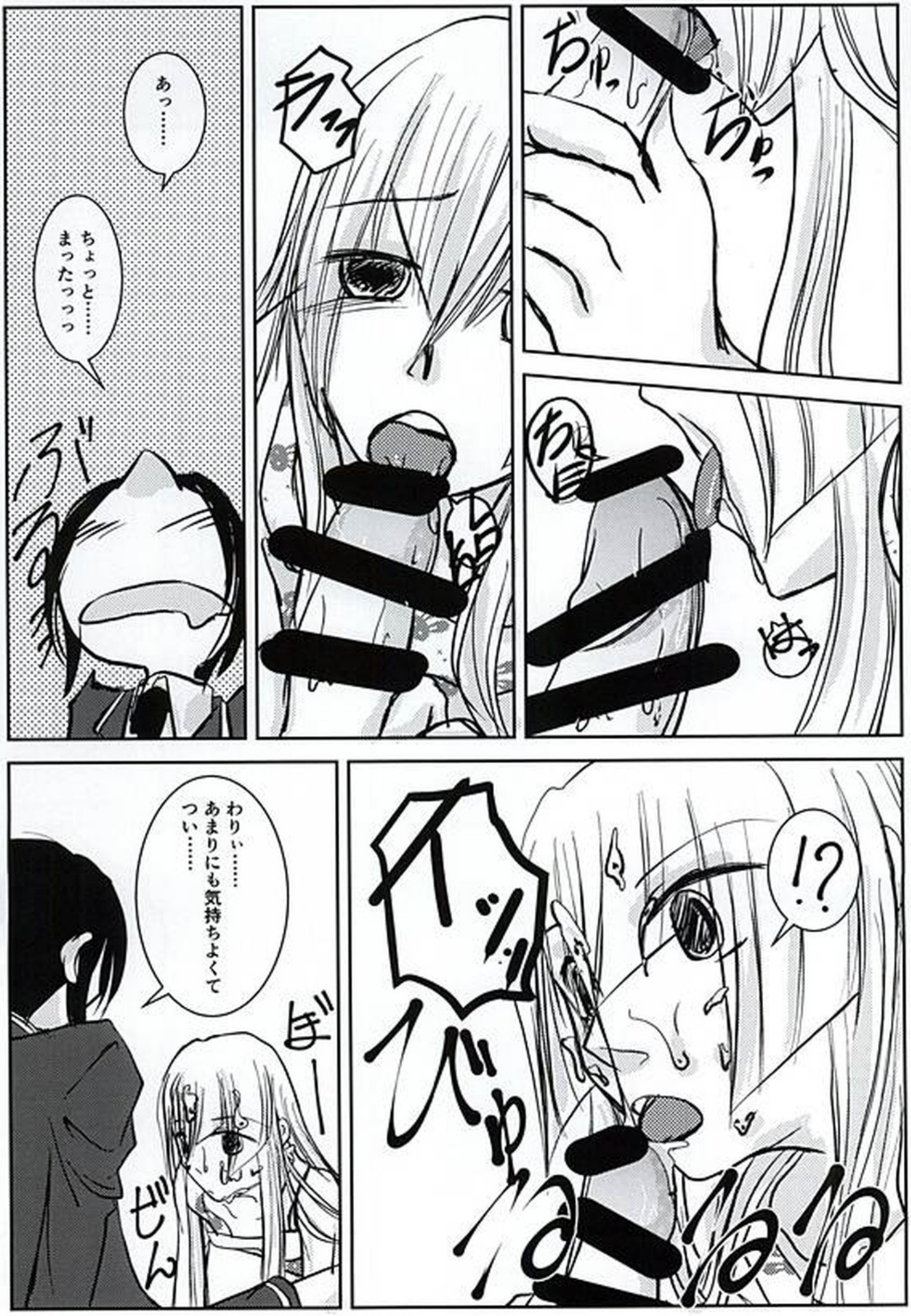
？

確かに……この格好はすっげー唆られるな……

なぁ……江雪……

ひとつ頼みがあるんだが……

ぱむっ
ふっ
ぺろ
じゅぷっ
じゅぽ
江雪……
んぐ
すっげー……
いい眺めだな……


あっ……
ちょっと……まったっっっ
ぢゅっ
ぢゅっ
ぢゅ
ぱっ
!?
イッ
ぢゅるるるる
わりぃ……あまりにも気持ちよくてつい……
ぼーー
ぜん

満足……
してもらえました……か？

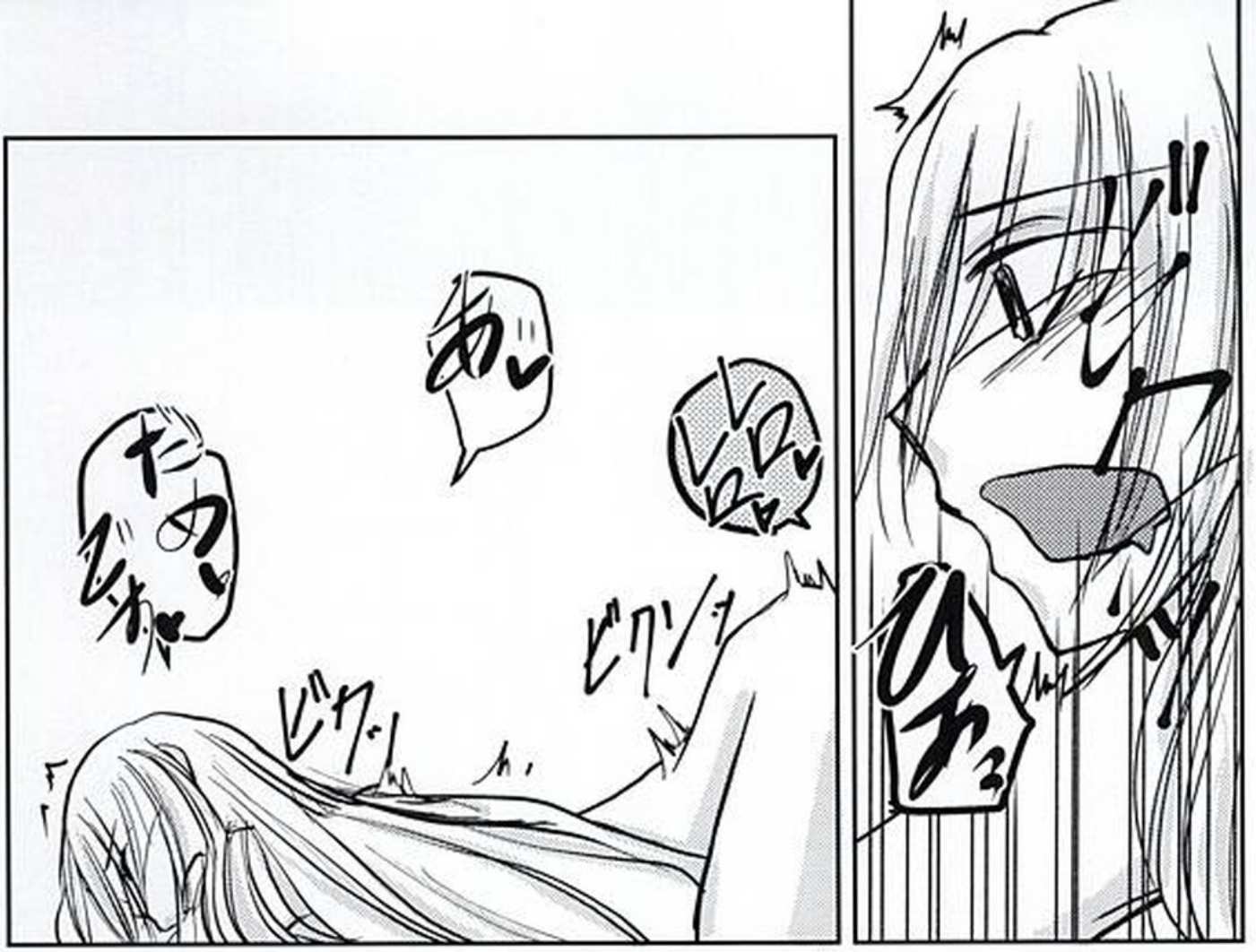
あ……
誰だよ
こんなの
教え込んだの
俺っちだよ
あの……

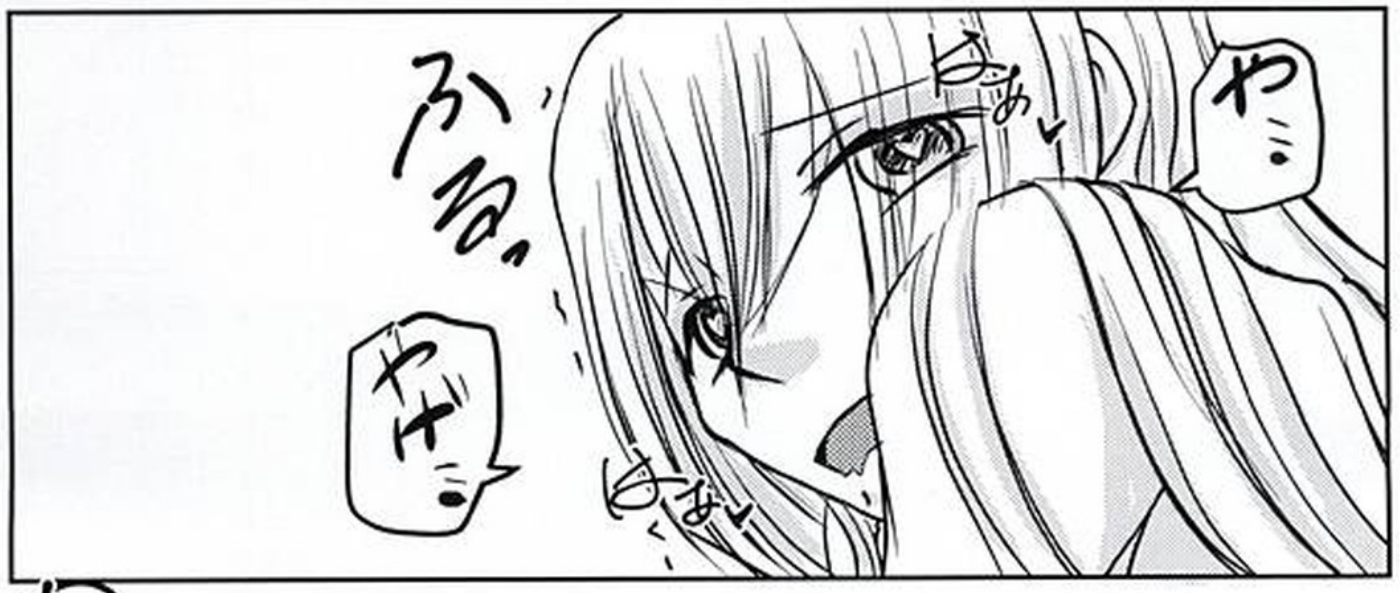
理性の
切れる
音がした

ん？

いざっ

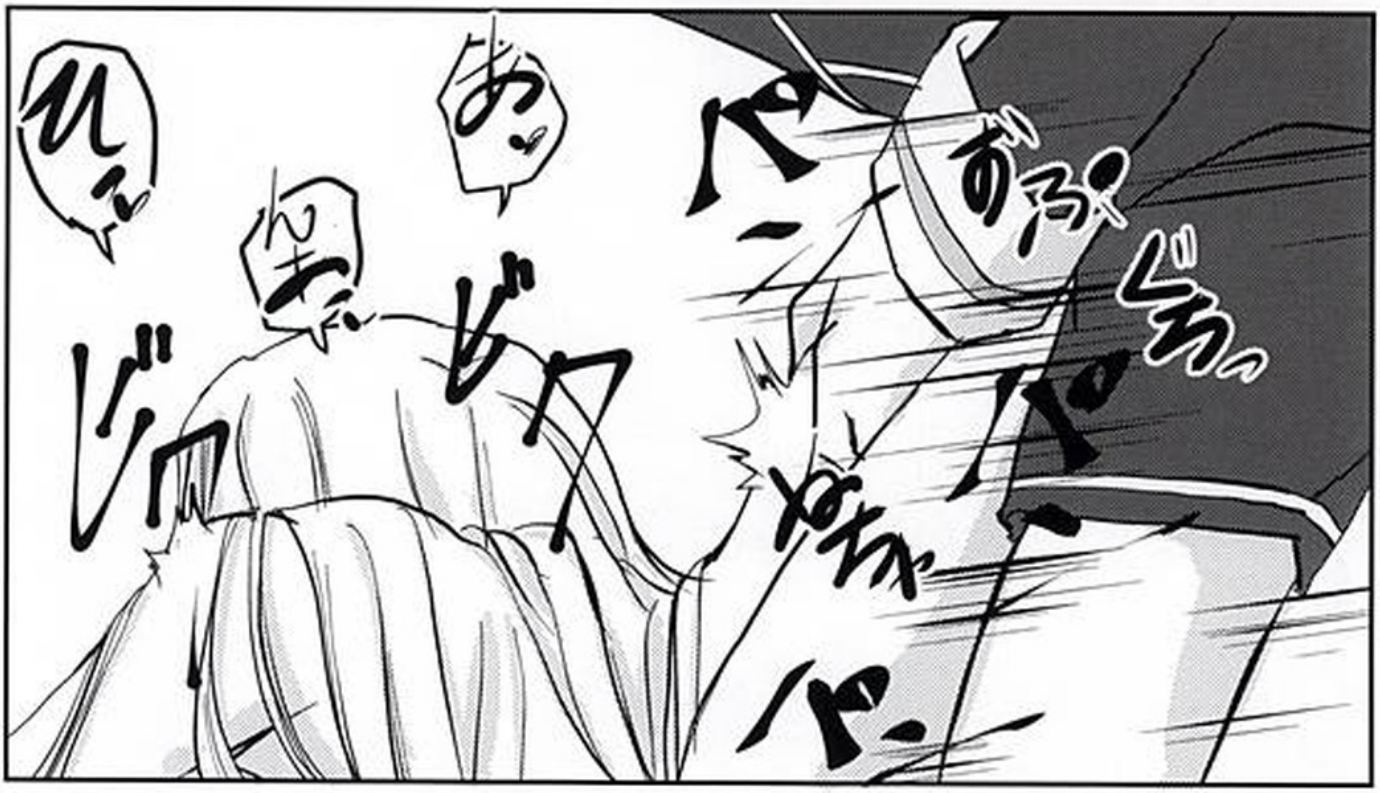
そんな風に
誘われたらさぁ！
!?


あ!
ビクッ
ビクッ
ビクッ


やっ
やば

はっ
うんじゃ、そろそろ……

ひぃ
ビクッ
ビクッ
ビクッ


ひぃ
あ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ずるっ
ぐちゃ
ぱ
ぱ
ぱ

これ……
いや……
や……げん……
いや……ですっ
あな……たの顔……見えないの……
い……っ

もっ
れ
も

ビクンビクン

!?
おわっ

は?

……江雪?
あの……もう一回……

本日二度目の
10分
理性の
切れる音がした

今度は……その……
今の体位のままで

この後めちゃくちゃ
（以下略）

翌日

おい……

薬研……

なんで昨日より疲労が溜まっているんだよ……

いや！……

江雪がなかなか離してくれなくてな！……

次のページからゲストだよ！！
かなえさんの薬雪だよ！！
わーい！！ありがとうございましたー！！！

『江雪左文字のご奉仕するにゃん』

「宗三……ちょっと聞きたいことがあるのですが」

ある暑い夏の昼下がり。

本丸の庭は、夏真っ盛りということで、うるさくて気が狂いそうな位、蝉が鳴いている。そんな中、宗三は冷房の空気が苦手な為、扇風機を回しつつ、団扇で涼を取っていた。

「何ですか？　兄上」

夏場ということもあり、自室に居る為、二人とも夏仕様の室内着に着替えている。この本丸の審神者は、着物の目利きはなかなかで、夏用の藍の作務衣は、大変よく長兄に似合っていると思いつつ、宗三は気怠げに返事をした。

「いえ……こんな昼間に聞くべきことではないのかもしれませんが……」

「……？」

微妙に口ごもりつつも、何だかわずかに頬を染めている江雪に、宗三は首を傾げた。

「何ですか？　兄上。僕に答えられることなら、お答えしますけど……」

「いえ……たいしたことではないのですが……」

元々長兄の喋りはゆっくりとしていて、大体のんびりの宗三でも、時折いらっとすることがある。

その喋りが、いつもより更に間延びしていて、その上何だかもごもごと、言葉を上手く連ねない。

長谷部から『お前は存外気が短い』と言われ、動作ではあった。

そもそも、今日は暑いのだ。

ここの審神者は、何でか知らないが大変極端な性格をしていて、季節はっきりしていた方がいい！　だから、夏と冬が大好きな人間で（寒いと暑いの中間は、はっきりしないのは嫌いだという性格なのだ……じゃあ春秋とは嫌いなのかというとそうではなく、春は何美味しい）食べ物が浮き立つから好き、秋は美味しいから好きと、全然別の意味で好きらしい。自分の住んでいた時代は、外気温が体温と同じなんてこともよくあったら、外気温を夏場は平気で体温と同じに調整してい正気に戻って、普通の夏の温度に戻すのだが……）

本日は審神者の正気が狂気になっているので、外気温は体温と同じである。これには、大体の刀剣が参っていて、みんなエアコンのあるリビングで冷えているようだ。

だが、冒頭に述べたように、左文字の次男は、冷房の空気が苦手なのである。

よって、涼むには大体扇風機、そして団扇装備なのだが、その効果はあまりないようだ。

その時は、その効果はあまりない。

その為、宗三はこの時脳みそが煮えていたのだ。そして、兄のこの口ごもりつぶり。少々いらっとして、対応が雑になっても、誰にも責められまいと、宗三はそう自分で自分を慰めていた。

「あ……こ、このようなことを……本当に、昼間に……聞くのは、はばかられ……ると……思うのですが……」

「……」

「ただ、」

こう言ったことは……本当に……貴方の方が……知っていると、お、もい、まして……」

「……」

「なかなか……その、聞きづらい、ことではあるの……ですが……」

「……」

いや、これは誰もがキレてもしょうがないですよね？　だって、この歯切れの悪さ、石切丸もかくやと言えるほどの、機動力のなさですよ！　僕なら……いや、多分誰も絶対に耐えられない、耐え難い話の遅さですよね！？

そんなことを思いつつ、宗三はある推測をして、ふうっとため息をつきながら、兄を見つめた。

「……薬研のことですか」

名前を出した途端に、江雪の顔がぱあああっと、もう夏の夜空の花火の華々しさになっていく。

それを見ながら、宗三はハァァァァッとわざとらしく。先ほどより大きなため息をついた。

「兄上の心配事といったら、最近はそれしかありませんよね……」

「あ、そ、そんなことは！　ない！　ですよ！」

急に長谷部並みの機動力になった兄をちらりと見て、宗三はますます呆れてしまう。人は皆、図星のことを言い当てられると、大概慌てて焦って早口になる。それは兄も例外ではないらしい。

「いいんですよ、そんなに焦らなくても。貴方が大事な大事な恋人のことで、焦ったり思い悩んだりするのは、普通のことですから」

「そういうものじゃないですか？　色恋って」

自分もはっきり知っている訳ではない。だが、天下人の間を渡り歩いてきた宗三は、それなりに人の心の機微を知っている。今は自分達も刀の形ではなく、人の形を取っているから、武器としてだけでなく、人の心を持ち合わせている。人として泣いたり笑ったり、勿論恋をしたり、それで苦しんだりというのは、そこここに転がっているのだ。

その転がっている悲喜こもごもの物語の中の登場人物に、目の前の兄はなっている訳だ。

「薬研は優しい男でしょう。何か問題でも？」

薬研は、織田の城にいた時からの昔なじみである。いつのまにやら兄の心を絡め取ってお研は、公認の恋人同士だ。

いて、この本丸では、どうやったのか知らないが、この色恋に疎

い兄を、手練手管で口説き落とし、掌でころこころと転がしているのだ。

「そう、ですね……薬研は、とても優しい……」

うっとりと目をつぶった。

薬研は確かに優しい。でもそれは懐に入れた人間に対してだけだ。宗三も初めは拒否されていたし、長谷部に対しても割と冷たい所があったが、長谷部は、薬研が信長の懐刀であったという矜持が、そうさせているのだろうと思う。

自分や長谷部は、織田の家にいても、居心地がいい訳ではなかった。最期まで見守ったあの主人の側に常にいた、破天荒な魔王の刀であったという刀なのだ。

どれほどあの男の誇りを高めているのかが、だからこそ、薬研は自分が認めた者以外に関しては、見た目こそ優しくしても、一定の距離を保っている。その薬研が欲しくて欲しくてたまらず、夜昼なく押しかけてあの手この手で、自分の兄を口説き落としていた様を思い出すと、うっかり苦笑が漏れてしまった。

「宗三……？」

不安になったのか、江雪がそっと声を掛けてきた。

「ああ、何でもありませんよ。気にしないで。それよりも薬研がどうかしたんですか？」

とにかく早く相談に乗ろう。暑くて鬱陶しくてたまらないのに、恋人の惚気につきあって余計に鬱陶しくなりたくはない。私の問題なのですが……」

「いえ……薬研、というよりは。

「兄上の？」

おやこれは。

兄はうっすらと頬を紅潮させながらも、おずおずと宗三を見つめてくる。ああ、薬研は兄のこういう所にやられたのだなぁと、そんなことを頭の隅でぼんやりと思った。

「実は……その……閨、ごとの、ことなのですが……」

「ああ……」

そうだろうと思ったと、宗三は肩をすくめた。

何でか知らないが、刀剣達は何故か、事に青江には詳しいけれど、変な誤解を持っている。自分だが、待ってとは言えない。アレだ。閨の刀、自分は打ってない欲しい。脇差の青江は、閨事はでなくてあのまるで主人の枕元にも侍しなければ、こくなるぁ。ぶっ知らや訳にはいのこくいの全然ないでなにるし、こくいの刀で色々聞いたりしてはなはいいのだけど、自分がそんな体験もまだは断じてこのとてなぁにいのだ！！！

関したこの目の前の兄は赤くなったり青くなったりして、

「？」

「もう一月……京都の夜戦に、薬研がかり出されて……その……」

「あぁ、時間がすれ違って、抱き合う時間がないとついう訳ですね」

「そ、むれすくと、江雪は耳まで真っ赤にして、

「はくれた顔をしました。

「ち……がいます！」

「欲求不満なんですか？」

「薬研は、その……私に、気を遣ってくれて、気にしなくてもいいと言ってくれています！」

口調で言い訳をした。

「あぁ、ちゃんとすることはしてるんですね」

それに時間がなくても、その……

「だ、から……そうでは、なくて……その、薬研だって、本当は……短くても、逢瀬を楽しみたいでしょうに……いつも忙しくしているのに……そういう、ことになると……私のことばかりで……」

（あー……）

目の前の兄が赤くなったり青くなったりして、

「薬研は、説明するのを聞いてしまった。

弟であるこの良い

ですが、その……」

「？」

「もう一月……京都の夜戦に、薬研がかり出されて……その……」

「あぁ、時間がすれ違って、抱き合う時間がないとついう訳ですね」

「そ、むれすくと、江雪は耳まで真っ赤にして、

「はくれた顔をしました。

「ち……がいます！」

「欲求不満なんですか？」

「薬研とすれ違って、薬研

口調で言い訳をした。

「薬研は、その……私に、気を遣ってくれて、気にしなくてもいいと言ってくれています！

それに時間がなくても、その……

「あぁ、ちゃんとすることはしてるんですね」

「だ、から……そうでは、なくて……その、薬研だって、本当は……短くても、逢瀬を楽しみたいでしょうに……いつも忙しくしているのに……そういう、ことになると……私のことばかりで……」

（あー……）

目の前の兄が赤くなったり青くなったりして、

「薬研は、説明するのを聞いてしまった。

弟であるこの良い

ですが、その……」

「？」

「もう一月……京都の夜戦に、薬研がかり出されて……その……」

「あぁ、時間がすれ違って、抱き合う時間がないとついう訳ですね」

「そ、むれすくと、江雪は耳まで真っ赤にして、

「はくれた顔をしました。

「ち……がいます！」

「欲求不満なんですか？」

「薬研とすれ違って、薬研

口調で言い訳をした。

「薬研は、その……私に、気を遣ってくれて、気にしなくてもいいと言ってくれています！

それに時間がなくても、その……

「あぁ、ちゃんとすることはしてるんですね」

「だ、から……そうでは、なくて……その、薬研だって、本当は……短くても、逢瀬を楽しみたいでしょうに……いつも忙しくしているのに……そういう、ことになると……私のことばかりで……」

（あー……）

目の前の兄が赤くなったり青くなったりして、

「薬研は、説明するのを聞いてしまった。

弟であるこの良い

ですが、その……」

「？」

「もう一月……京都の夜戦に、薬研がかり出されて……その……」

「あぁ、時間がすれ違って、抱き合う時間がないとついう訳ですね」

「そ、むれすくと、江雪は耳まで真っ赤にして、

「はくれた顔をしました。

「ち……がいます！」

「欲求不満なんですか？」

「薬研とすれ違って、薬研

口調で言い訳をした。

「薬研は、その……私に、気を遣ってくれて、気にしなくてもいいと言ってくれています！

それに時間がなくても、その……

「あぁ、ちゃんとすることはしてるんですね」

「だ、から……そうでは、なくて……その、薬研だって、本当は……短くても、逢瀬を楽しみたいでしょうに……いつも忙しくしているのに……そういう、ことになると……私のことばかりで……」

（あー……）

目の前の兄が赤くなったり青くなったりして、

「薬研は、説明するのを聞いてしまった。

弟であるこの良い

（ホント、信長の懐刀は狂ってる）

「あの男に関わる刀はみんな狂っているんだろうと、宗三は思う。そして、この兄もそんな狂気に飲み込まれているのだろう。

「兄上。僕に考えがあるのですが」

「所詮人の身は泡沫よ。夏の暑さに当てられて、色恋に狂っているのだろうよと、宗三は思うと、口の端をにっとつり上げた。

「きっと、悦ぶと思うのですよ……」

深夜。

薬研達夜戦部隊が、帰ってきた。

各々、それぞれの部屋に戻っていく。薬研も、審神者に簡単な報告を告げて、自室に戻る為に、縁側を歩いていた。

「あっちぃ……」

いい加減、外気温が体温なのは止めて欲しいと思う。それでなくても、京都もそんなに涼しい地形ではない。

昔の主と共に上洛したあの土地は、夏は地獄のように暑く、冬もまた地獄のように寒かった。だが、世界の中心であったあの土地は、まるで夢幻のように美しかったと記憶している。

雪や桜に霞む、美しい寺社を思い出すと、思わずその中に佇む、美しい想い人の横顔を思い出してしまい、

「何だかなぁ」

息を飲んだ。

「……ここ一月、戦況ははかばかしくない。そのせいもあって、毎日あの忌まわしい土地に赴いて、戦いの為、自分の大切な恋人に、そのお掛けられない状況だ。

夜戦で、朝の挨拶から勤しむ薬研と、深夜から朝務をこなしつつ、時折遠征に出向く本丸で内番や執務をこなしつつ、時間帯がずれている江雪は、今やすっかり生活時間帯がずれているのだ。

たまに、部屋までが、江雪が来てくれていたのは知っていた。だが、夜戦で疲れて、床に入ると全く目が開かない。結局、自分の寝顔だけ見て、江雪は切なそうにため息をつくと、額に口づけを落として帰って行く。

そんな恋人の優しくも愛おしい行動に、何度も起きようとしてしまいたいと思ったが、抱きしめてしまいたいが、本当に……本当に、体力が持ってはいるのだが。

「あー……次の出陣は3時間後、か」

夜戦は、出撃できる刀剣は少なく、而もこの本丸の刀剣は脇差・打刀がやってくるのが、他の本丸よりも少し遅かった。早めに来てなくれた大太刀やり太刀によって、部隊構成がそれらの練度が上がった辺りで、京都の夜戦、練度が最低レベルでも30以上はある勿論、戦が告げられたのである。

「いや、あの、土地でのこんなことを考えても仕方ない。今夜戦部隊の敵は……。

総隊長は俺っちなんだから……」

審神者もわかっているが、今の夜戦は夜戦を戦える刀剣のレベリングも兼ねている。しかし敵の戦力を考えると、薬研を抜くことは出来ない。だから薬研は連戦になる。

審神者だけでなく、この本丸の全ての刀剣は、薬研と江雪が恋仲であることを知っているので、この夜戦が始まってからの二人に対しては、本当に申し訳なく思われているので、

しかし、薬研自体も本丸全体が、二人に対して申し訳なく思っていることは重々承知しているし、まさか二人きりの時間を下さい、とは言い難いのである。仕事なので。

「はぁ……とりあえず仮眠するか」

そこでため息をつきながら、部屋の障子を開ける。

「……薬研」

薬研は、がっちりと固まってしまった。

いるはずがない、もう寝ているはずの恋人が、何故か部屋の真ん中にちょこんと座っていた。

何故か！　猫耳をつけて！

「……どう……しました、か……」

それはこっちが聞きたいと言いたかったが、全くわかってない顔をして江雪を見て、ぐっと言葉を喉の奥に押し込めた。

「いや……もう、寝てるんじゃないかと思ったからさ……な、何か用事か？」

「用事がないと……来てはいけませんか……？」

江雪の頭に取り付けられた猫耳がゆらゆらと、小首を傾げる度に揺れる。何だこれ、何かの罰ゲーム？

と薬研は困ったように頬を引きつらせた。

「来ちゃいけねぇって訳じゃねぇんだが」

「それは、そういないでありませんか……」

「それならいいけどよ。いや、だけどあんた明日仕事じゃ」

「明日は……非番です……」

「そ、そっか……」

「……」

「……」

会話が、続かない。

どうしたもんかと、江雪を見下ろしていると、江雪は頭についている耳を触りながら、上目遣いに薬研を見上げた。

「あの……何だい」

「なぁ、何だい合いません」

「似合っているのかね……これ……」

「……さっぱりわかってなかったらしい。

薬研が困った顔をしてるのを見て、江雪は耳がちょこんと乗っかっていて、とてもかわいらしい。でも、この状況はどういうことだ。

いや、似合っている。江雪の頭に、白い猫耳がちょこんと乗っかっていて、とてもかわいらしい。でも、この状況はどういうことだ。

不思議そうにゆらりと頭を動かして、それから何かにひらめいたように、目をぱちぱちと瞬くと、こてんと小首を傾げて、まるで招き猫のように、顔の横に手を構えた。

「え、ええと……ご主人、様に、ご奉仕、するにゃん……？」

「……」

「ええと……違い、ましたかね……？　この構えじゃなくて……にゃん……」

首をふるふると振りながら、寄る辺のないすがるような顔をして、薬研の足下にまでにじり寄り、見上げてくる江雪の顔を見て、薬研の中の大事な何かが、ぷつんと音を立てて振り切れた。

「ふ、んんっ……んむっ…ちゅっ……ふっ……」

部屋の中が暑い。

じっとりと、汗を額に滲ませながら、薬研は足下にうずくまる江雪の顔を見下ろしていた。

「はっ……ふ、むっ……ふっ……んくっ……ちゅぷ……う、んむっ……」

江雪は、薬研の欲望を、口内の粘膜で、丹念に刺激していた。

愛おしげに口に含んで、強欲を、舌で歯で、頬を紅潮させて、必死に薬研の欲望を暴れる薬研の腰を、喉に力を込めて、きゅうっと吸い上げると、薬研の腰が僅かに震える。その姿を見ながら、江雪は目を細めて、幸せそうに笑うと、ゆっくり薬研自身に絡めていた舌をゆるめて、解放する。

一瞬腰が揺れて膝が崩れそうになるのを、厚かの江雪は支えると、薬研の欲望の先端を、柔らかい粘膜に、江雪の舌がねっとりと当てられて、そのの感触だけで腰から背骨にかけて、しびれるような快感が駆け上がっていく。

「何だ、いつの間にこんなに、上手になってるんだい……？」

少し意地悪な睨むような視線を送ると、江雪は困惑したような顔をして、そっと薬研から口を離した。

「そんな……私を……疑っている、のですか……」

「まさか。だけど、江雪はこんなふうに積極的じゃなかっただろ？　だからさ」

「その……わ、私だって、薬研と会えなくて、寂しかったですし……でも、今は貴方も大切なお役目を担っているのですから……それを邪魔するのは、本意では、ないのです……」

「江雪……」

寂しそうに顔を伏せる江雪を見て、薬研の胸に愛しさがこみ上げる。

自分よりも年上の、けれど感情の表現の苦手な恋人が、不器用なりに愛を告げてくれているのだ。こんなに幸せなことはない。

分だが、薬研のそんな気持ちは伝わらず、半分震えるような声で、切々と江雪は己の気持ちを訴えた。

「だ、けど……もう、一月、です……貴方に触れてない……触れられて、ない……です……だから、その……わ、私から、その……」

「……」

「あの、こういうことは、いつも薬研が……気を遣ってくれたから……私はその、薬研に任せるばかりで……よくないと、思って」

「……」

「だから。私も、愛おしいのだと……言ってみたいと思いまして……宗三に相談したら、こうすれば男はみんなぐっとくると……」

「あー……やっぱ、宗三か。まぁ、納得だな……」

苦笑しつつ頭を掻きながら、足下にうずまる江雪の頭をぽんぽんと撫でた。江雪はゆっくりと顔を上げると、薬研を見上げた。

「あんたの気持ちはわかってる。ちゃんと伝わってるよ……でも、いけねぇな」

「そういう閨事を、例え弟だろうと、他の男に相談するのか？」

ぎらりと、欲にまみれた色が、薬研の瞳に浮かぶ。それにのまれるように、うっとりと江雪は薬研を見つめた。

瞳の中に燃えるような赤い色が見えた。これは炎の色だと、江雪は感じた。炎に巻かれて焼けた時の色。その色を見つめるだけで、身体の奥がじんわりと熱くなる。

「ほら、もう一度……ゆっくり、飲み込むんだぞ……？」

あやすような声を聞いて、江雪はうっとりした瞳で薬研の欲望を見つめると、ゆっくり口を開いて、迎え入れた。

「はむっ……ふ、んんっ……くぅ……ちゅっ、ちゅく……くっ、うっ……」

喉の奥まで吸い込んで、それからまた離して。頭を前後に揺さぶることで、薬研の欲望を追い詰めようとしていく。

薬研もめざとく、江雪が興奮しているのを見つけた。足先で、江雪のしゃがみ込んでいる股間をつついたり撫でたりして、刺激する。

「はっ……！　ひっ……むぐ……っちゅっ……あ、なっ……だ、めっ……」

いきなり波立ちの刺激に、江雪の長い髪が大きく薬研の腰が立ち上がりそうになる。口から顔をそらそうとしたが、強欲がこぼれて、辛そうに目を閉じ、それを押さえつけて、薬研は頭を押さえつけると、思い切り口に自分の欲をねじ込んだ。

「ぐっ……はっ……んんっ……んんっ……！」

突然のことで、喉を詰まらせてしまい、思わず反射的に吐き気を催して、吐き出そうとするが、薬研が頭を押さえ込んで、腰を前後に揺り動かしているので、動くことも出来ない。激しく

薬研の足先で、服の上から弄られている江雪の股間は、すっかり膨らんでしまっていて、親指と人差し指で挟んで弄ると、その度に腰

が引くようにはねていた。
「ふっ……あ、あっ……ぐぅ……うぐっ……」
口の中に涎と薬研の先走りがたまって、苦しい。けれど、恋人に激しく求められている、という、この状況が江雪の胸を熱くする。
「んんっ……もう、ちょっと……深く、吸ってくれ……そうそう、いい子だな」
自分より年下の恋人に、子供扱いされる異常な状況すらも、愛おしい。言われたとおり一生懸命、健気に吸い上げて、愛おしそうに、江雪の粘膜に、薬研は少しばかり刺激してくる。眉間に皺を刻んだ。
「くっ……久しぶり、だんだんかたくなってきそうな……イクぞ、ほら、しっかりのんでもたねぇな……」
付いた。ながら、それでも必死に、江雪は酸素欠乏になりそうな姿が愛おしくもあり、しかし、この欲望を早く吐き出したいという気持ちもあって、薬研は足先で遊んでいた。江雪の欲望を、つま先でぎゅっと踏みしめた。
「……っ！？　のんんっ……！！！！」
恐ろしいほどの刺激が、自分の股間から駆け上がってきて、江雪は、口に含んだ。反射的に、恋人の剛直を、締め上げるように吸いた愛しいきて、江雪の喉の奥、身体の奥に突き上げるように、自分の欲望をほとばしらせた。
「はっ……ぁ……」
大きな動きに耐えられず、思わず江雪は薬研の剛直から吐き出した。吐き出し足りない自身を口から出ました。
「あっ……はぁ……」
欲望が、どくどくと震えながら、江雪の美しい顔にかけられた。どろりと液体を感じて、雪の腰がびくんと解放されたのを感じる中で、江雪の欲望が熱くて、溶けてしまと幸せで、自分の腰から下が
「いそうだと目を細めた。
「おっと……目にかかってないか？　大丈夫か？」
吐き出は止まっていないが、慌てて顔を背けさせようとするが、江雪はいやいやをするように首を横に振ると、薬研の精液を顔に受けて、うっとりと目を閉じていた。その顔は、欲望に蕩けていて、たまらなくいやらしく美しい。
つの間にこんな顔をするようになったのかと、薬研はまたせり上がってくる欲望に耐えていた。
口の中にあふれた、恋人の精液を味わうように口の中に留めて、くちゅりと口の中で咀嚼して、それから江雪はゆっくり喉を鳴らして、飲み込んでいく。
ふるりと頭が震えて、喉が動く。嚥下されていく自分の欲望が、江雪の身体に溶けていく想像をして、薬研はたまらず、江雪の頭を掴んで、見上げさせた。
「ごち、そうさま……でした……」
嬉しそうに目元を赤らめて、幸せそうに呟く江雪の口元に、そっと唇を寄せた。
「いやいや、ごっちそ、ごちそうさまだぜ」
まだ、名残惜しい。そう思いつつも、吐き出してしまった薬研の体力は残っていそうもなかった。まだ、触りたい。でも、触れない。もどかしい気持ちが、身体の奥にじわりと広がっていく。
「かー……まだ触り足りないんだがなぁ」
「薬研はまだ任務があるんですよね……」
残念そうな江雪の言葉に、薬研は苦笑する。
「まぁ、仕方ねぇ。京都征伐が終わるまで、なかなか二人きりになれないが」
「そう、ですね……」
「でも、また」やってくれると、嬉しい」
「？」
「ご奉仕するにゃん、ってやつ」
そう言うと、江雪はぱあっと花が開いたように笑った。その笑顔を見ているだけで、疲れが癒されていくようだ。
「あ、の……」
「何だい？」
「お風呂……一緒に入ります……？」
「……そうだな」
そう言って微笑むと、江雪も幸せそうに微笑んで、立ち上がると寄り添うように、二人手をつないで風呂場に向かった。
「おい、宗三」
「何ですか？」
「お前、江雪に変なこと教えるな」
「変なこと？　お役に立ったのでは？」
「ま、まぁそうだけどな」
「僕は、ほめ貴方達の為に頑張ってあげたのですから、ほめてもらってもいいくらいだと思いますよ？」
そう言って、にやにや笑う宗三に頭が上がらないと、頬を引きつらせる薬研を、江雪がやっぱりよくわからない顔で、こてんと首を傾げて見つめていた。
「ご奉仕、するにゃん、であってたんですかね……」
「合ってたんじゃないですかね？」
「次は何をすればいいんですかね……？」
「兄上……そういうことは僕に聞くなと薬研から言われて……」
「次は、どうすればいいですか？　宗三……」
こんな天然バカップルに巻き込まれる運命なんて、僕は認めていないんですよ……！

TOUKENRANNBU

yagenntousirou

×kousetusamonnji

20151004 C'est La Vie